

学習に関わる障がい①

限局性学習症(LD) 旧名:学習障がい

知的障がいの子どもと限局性学習症(LD Learning Disability)は、発達に遅れがあるという点で似ているためよく間違われることがあります。知的障がいの子は、発達の多くの面で同じ年の子と比べると遅れています。しかし、限局性学習症の子は、全体的な遅れはなく、ある部分に限られています。発達に偏りがあり、順調に発達している部分とそうでない部分があるため、学齢期になって集団での学習が始まる頃に発見される場合が多いです。その原因は、中枢神経系に何らかの機能障がいがあると推定されており、視覚障がい、知的障がい、情緒障がいなどの障がいや、環境的な要因が直接の原因となるものではありません。限局性学習症の定義は「基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得とその使用に困難を示す様々な状態を指すもの」(文部科学省：学習障がい児に対する指導について(報告) H11.7.2)とされています。①言語能力 ②読字 ③書字 ④算数・計算 ⑤推論の困難 ⑥社会性の困難 ⑦運動 ⑧注意集中・多動等の困難があげられます。

よって学齢期では、集団場面での指示理解の悪さ、基礎学力面のつまずき、学習態度面での問題(離席等)、整理整頓の悪さ、集団行動が苦手なことなどがみられます。男の子の方によくあらわれほぼ4:1の割合となっています。わんぱくな子と勘違いされることも多いようです。しかし、上記に述べたような子が全て限局性学習症というわけではありません。正確な診断は、専門家による色々な検査をしてからでないといけません。障がいの診断をするのは、その子がわからない事由は、怠けていたり注意不足だったりするのではないこと、なぜそうなるのか原因をはっきりさせて、周りの人に正しく理解してもらうためです。また、その子に合った学習方法を考え、理解しやすいような教え方や話し方を工夫し、教材等を整えるためです。

ディスレクシア ディスグラフィア (識字障がい)

中枢神経に何らかの機能障害があると推定され、このうち特に読み書きに困難を伴う場合を「ディスレクシア」(読字障害)、ディスグラフィア(書字表出障害)といいます。読字障害があると、結果的に書くことも難しくなるので読字障害は書字表出障害を合併している場合も多くあり、「読み書き障害」と呼ばれることもあります。これは知能障害ではなく、機能障害です。ギリシア語の「できない(dys)」と「読む(lexia)」「書く(graphia)」に由来し、耳から入る情報、目から入る情報などを正確に自動的にすばやく処理できないことに起因します。文

識字障がいの苦

- ①外からわからない、理解さ
- ②理解されないだけでなく、
- ③いじめや差別の対象になり
- ④読み書きがしんどい苦しさ
- ⑤他人の何倍も努力や時間を
- ⑥自分自身も自分の障害(喪

文字がにじむ

識字障がいの苦

- ①外からわからない、理解さ
- ②理解されないだけでなく、
- ③いじめや差別の対象になり
- ④読み書きがしんどい苦しさ
- ⑤他人の何倍も努力や時間を
- ⑥自分自身も自分の障害(喪

文字が歪む

苦のびた朝寝猫

- ち難野、じびた朝寝猫①
- じびた朝寝猫②
- じびた朝寝猫③
- ちJ苦じちみJぢち書ぢぢ④
- ち間初ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ⑤
- ち間初ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ⑥
- ち間初ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ⑦

逆さ文字に見える

識字障がいの苦

- ①外からわからない、理解さ
- ②理解されないだけでなく、
- ③いじめや差別の対象になり
- ④読み書きがしんどい苦しさ
- ⑤他人の何倍も努力や時間を
- ⑥自分自身も自分の障害(喪

文字がぼやける

字がかすんだり、揺らいだり、鏡文字に見えてしまう人もいます。また、ディスレクシアといっても、「読字」のみに困難がある場合や「書字」のみに困難がある場合、両方合わせ持つ場合と、人それぞれ特徴が違います。ディスレクシアは日本人では5～6%、欧米人では10%と推計されています。

識字障がいの苦しみと悲しみ

- ①外からわからない、理解されない障害の苦しみ
- ②理解されないだけでなく、知能が低い、怠けているなど誤解される悲しみ、くやしき
- ③いじめや差別の対象になりやすい二次被害的な苦しみ
- ④読み書きがしんどい苦しさ、心身の疲弊
- ⑤他人の何倍も努力や時間を要し、学習の成果がなかなかでないもどかしさ
- ⑥自分自身も自分の障害（喪失）をわからないままに、苦しみや悲しさだけを味わうことの辛さ

特に注視したいのは、まず⑥、そして④と①です。（識字機能の）喪失を自覚できないままに、悲しみや苦しきだけを受けることです。なぜ、自分は不当な扱いを受けるのか自分にもわからない、自分が特別に出来が悪い人間なのかと思ひ込んでしまうことです。子どもには自分が識字障害であることさえ、わからない場合もあります。「外見上も見分けがつかない上に、自覚できない機能障害」があることは、あまり知られていようです。

5～6%ということは、学級にディスレクシアは2人程度はいることになります。しかし、教師が症状に気づいたり見分けるのは、大抵ではありません。本人がどう見えているかなど、殆ど本人にしかわからないからです。そして、正確な見分けや診断は専門医によります。

さて、私たちは識字障害の子どもにどんな手立てができるでしょうか。例えば、いくつかのパターンシートを用意して、どんな場合に読みやすいか、書きやすいかを尋ねます。そして実際に書かせます。そうすることで、ある程度見え方が類推できるのです。文字列がゆがむ子には、太い罫線（補助線）をひいて、隣の行との区別をしやすくするなどの手立てが考えられます。

同じ年齢でも、子どもによっては学習困難が伴ったり、能力や学力の差も大きいものです。そういった場合、一般的な到達度や定着度とは別に、その子なりの目安や手立てが必要となってきます。例えば、「問題を書き写せた」「大事な所に線を引けた」「自分なりに絵図にできた」等です。そこには認知と再生という学習が働いています。そして、その子が過ごしやすいうように、学習しやすいうように環境を整えてあげることが、物理支援だけでなく、気持ちの支援にもなります。そのためには、できうる限り対象者理解に努める（心情理解と身体・症状理解）ことが大事とは思いますが、なかなかたやすいことでは、ありません。本人にしかわからない、言葉で表現できないことも多々あろうと推察するからです。

<参考資料> 南雲明彦オフィシャルウェブサイト <http://nagumo-akihiko.com/dyslexia/>

岩手県公立高校支援センター部 <http://www2.iwate-ed.jp/mae-y/syougaijijyouho/shougaiyouki/ld.htm>